

薪を円形に積むというのはどういふことか、さつそく調べてみた。シベリアで見たとか、スイスで見たとかいろいろある。「スイス積み」という名前もよく出てくるのだが、あちらでは「holz hausen=木の家」と言うらしい。積み方を教えてくれるテキストや動画もいろいろあるが、それらによると薪を円形に並べて積んでいき、円の内側の空洞にも薪とか枝とかを詰めていくというシンプルなものだ。これならできそうだし、形も悪く無い。基本は円筒形なのだが、ものによっては上にいくほどゆるやかに広がっているものや逆に狭まっているのとか形は微妙に個性がある。また、薪のいろいろな形の断面が円のカーブに沿って表情をつくっているのも良い。なかには枝だけで積んでいるのもあつて大小の丸で壁ができているのはちょっとしたアートだ。

さて、どこに積むか。こんな形なら草や木々に囲まれたところにこそ似合う。昨年の反省も造形美への憧れの方が優つてしまうのは困つたものだ。場所を決めたら円形に草を刈りさつそく積み始める。昨年の経験のあるし、少しぐらい凸凹があつた方が味が出るような気がして、直線上に積み上げるより精度が要求されない分、楽だと思つた。ところが思わぬ落とし穴があつた。やはりね。

円筒形に積むということは、筒の内側の円と外側の円では長さが違わねくはいけない。ほぼ同じ幅の薪を積んでいくとなると、どうしても扇状に外側が開いてしまう。その外側の隙間を埋めるように次の薪を積んでいくと徐々に外側に傾いた状態になってしまうのだ。そのまま積み続けるとどんどん傾斜は急になり積んだ薪が滑り落ちてしまう。積む薪の傾きの調整は、昨年の木熊積みでやった方法を応用し、ところどころ外側の円に沿つて横向きに薪を置き、それを枕にして次の薪を積むことにした。そうすると外側への傾斜は修正され地面と平行に戻るのだ。そうやってどんどん積んでいったら、中の隙間に薪や枝を入れて崩れにくくしなくてもいけそうだった。

出来上がった円形の木熊はなかなかの造形で、環境アートのようだった。若い頃に好きだったニルス・ウドとかアンディー・ゴールズワージーといったアーティストの名前が思い出されて、一人世界に浸つてしまった。夕暮れになったらランタンを持ち出して円筒形の筒の中に置いて、木熊にできたたくさん薪の隙間から漏れる光を楽しんだりもした。そんな木熊も冬はすっかり雪に埋もれて雪の小山になってしまったが、それも季節の風景のひとつとなっているのでよしとしていた。

そんな思いは、春の雪解けとともに消えて後悔だけが残つた。雪の小山から出てきた木熊はデジャブのように昨春の無残な姿に似てあちこちの薪が崩れてしまつていた。さらに設置した場所が最悪で、春の雪解け水にすっかり浸つてしまい地面に近い方の薪は見るからにそう遠くない先に土に還らんとしていた。草や木々に囲まれた場所に木熊が凜と立つ姿は風景としては心を打つものがあるが、良い薪をつくるという視点からは最悪だと二度目にしてようやく納得することになった。

